琉游舎

アトリエ琉游舎だより 179号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2024年5月22日発行

琉游舎 七歳の誕生日

●5月20日で琉游舎は7周年を迎えました。周年の恒例により今回も数字にまつわるお話です。
●西洋において数字の「７」は特殊な意味合いを持っています。旧約聖書の「創世記」に、「神が天と地と万象とを6日間で創造し、7日目を安息日とした。」と記されていることに基づいているようです。これにより、数字の「７」は聖なる数であると考えられています。1週間は7日、ラッキー７、7つの大陸と7つの海、7不思議などの呼び方もあります。
●7つの大罪と言う言葉もあります。ここでの「罪」というのは、人間を罪に導く可能性があると見做されてきた欲望や感情のことを指しています。カトリック教会では、「高慢」、「物欲」、「嫉妬」、「怒り」、「色欲」、「貪食」、「怠惰」を指しているようです。仏教で言う「三毒（欲・怒り・無智）」や「我慢・邪慢・増上慢」に通ずる言葉ですね。
●仏教においても、例えば「初七日」や7日ごとの7回法要の最後の供養としての「四十九日供養（7×7日）」という形で「七」は特別な数字と捉えられているようです。
●「７」を幸福の数字で挙げられている例に日本では七福神があります。恵比寿、大黒天、福禄寿、毘沙門天、布袋、寿老人、弁財天です。それぞれはヒンドゥー教、仏教、道教、神道など様々な背景を持っており、七福神は国際色豊かな幸福の神様と言えるでしょう。
●「７」は数や回数の多さを示す時にも使われます。「親の七光り」や「七転八倒」「七難八苦」などです。親の七光りで会社や政治家を継いだ人は数え切れないくらいいます。データはありませんがだいたい二代目で会社を傾かせ、三代目は会社を手放す例が多いような気がします。現代の政治家は三代目や四代目の議員もいるようです。実業界の例に習えば彼らも3代目あたりで傾いた日本を手放しかねないのですが、日本の現状を七転八倒、七難八苦の状態と認識できないようで、親の七光りで相続した利権を守ることに汲々としているようです。そろそろ退場して欲しいですね。

5月・6月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			23 映画会 13時半から	24	25	26
27	28 読書会 13時半から	29	30 映画会 お休み	31	6月1日	2
3	4	5	6 映画会 お休み	7	8	9 写経会 13時半から
10	11 読書会 13時半から	12	13 映画会 13時半から	14	15	16
17	18	19	20 映画会 お休み	21	22	23

読書会
5/28・6/11
（火）13時半

写経会
6/9（日）
13時半

映画会
5/23・6/13
（木）13時半

狂言綺語…日常と非常

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

先日久しぶりの大学クラス会で東京に出かけてきました。入学時に出会った同級生の卒業後の進路はバラバラですが、少人数で連絡を取り合っている内に、自然発生的に20名ほどの仲間が集まり、50歳を過ぎてからは二年に一回ほど集まって旧交を温めてきました。今回はコロナ禍の中断があっての久しぶりの再会となり、14名が集まりました。60歳前に働くことをやめて、育った地元に戻って気ままな毎日を過ごしているのは私だけで、65歳になってもまだ皆さん非常勤や顧問などの現役で都会で働いている人ばかりでした。高齢者と呼ばれ年金も支給される年齢境界線の65歳を突破した人たちの集まりは、二時間飲み放題の若者だらけの店でも場違いとは思えないほど飲んで食べて語り合い、二次会まで突入しホテルに戻ったときは11時半になってしまいました。いつもなら9時に寝ている私には、完全に非日常体験となった東京行でした。

たまに非日常体験をすると見えてくることがあります。卑近な例ですが、街の変化には東京に行く度に驚かされます。今年２月には新しくなった渋谷駅で危うく迷子になりかけました。今回の会場の神楽坂はかつては大人の街で、芸者さんと隠れた名店のある街の印象があったのですが、今では若者で店も歩道も溢れています。物価高も身にしみました。宇都宮線の普通車グリーン券がいつの間にか倍近くに値上がりしていたのです。みどりの窓口の縮小と併せて民営化がもたらす利益至上主義の結果なので、民営化を認めた国民に最終的に累が及ぶことについては甘んじて受けるしかないのでしょう。既にじわじわと押し寄せている郵政民営化の影響も「しょうがないな」から「不便！」というレベルになるのは時間の問題でしょう。また４年前のクラス会で泊った都内のビジネスホテルは7千円でしたが、今回都内で泊まれるところは軒並み1万4千円以上だったので、荒川を渡った埼玉県の川口に1万円で宿泊しました。4年間で宿泊費は驚異的な上昇です。もちろん年金は増えているわけでもなく給料もさほど増えているとは思えません。日々を栃木の田舎でのんびりと暮らして、日常を如何に心安らかに過ごすかを心がけている身にはこの非日常体験（あくまでも私にとっての）はかなりショッキングなことでした。今回の非日常体験で得た私の感慨は「嗚呼、日本は貧乏な国になったな！」です。政治家や経済学者に言わせるとお門違いな感慨かも知れません。「街はどんどん生まれ変わり人もそこかしこに溢れかえっているではないか、どこが貧乏なんだ」と。しかし同額で購えたものが半分の価値のものになっているのですから、貧乏になったとの庶民感情は偽りのないものでしょう。

現在は過去の結果です。現在は未来の原因です。これを仏教の世界観である縁起の法則を適用してみると、私たちの今も未来もすんなりと理解と予測ができるのです。現象的事物はすべて因（直接原因）と縁（間接原因）との2種の原因が働いて生ずるとみる仏教独自のこの教説についてお釈迦様は「縁起をみる者は法（真理）をみ，法をみる者は縁起をみる」また「これ有るが故にかれ有り。これ無きが故にかれ無し」あるいは「これ生ずるが故にかれ生ず。これ滅するが故にかれ滅す」と語っています。現象の生滅も有無もすべて現象間の相互関係によって成立しているので普遍的固定的実体というものは何一つ存在しないのだと言うことです。「諸行無常」です。日蓮聖人が「立正安国論」で蒙古襲来を予測したのも、今の現状をありのままに観てそれがいかなる過去の因縁によって今があるか知り、今の現実が原因となれば未来へとどのように縁起していくかを、ありのままに観ることが出来たからの蒙古襲来の予測です。それは決して予言ではありません。過去の因縁（歴史）を分析し、今の因縁（社会状況）を調べ、それを聖人の哲学（法華経）によって体系づけた結果の予測です。これを非科学的であるから非合理な宗教的予言者の妄言と断じることはできません。合理的視点とは常に正誤の分かれ道で理性と数式に還元できる科学に従って正しいと判断された結果選んだ道でしょう。数式に置き換えられる現象は森羅万象の一部にしか過ぎません。理性は善悪や真偽の判断に基づき概念的合理的に思考された結果に過ぎません。善悪や真偽、正邪もある一定の価値観の結果です。価値観を基準にすれば日蓮聖人の予測も信行によって培った価値観です。私はどちらの価値観が正しいのかどうかの立場は取りません。どちらの価値観も等価です。生まれてこの方私たちは教育によって基本的には理性的価値観によって合理的思考を身につける訓練をしてきました。しかし50歳を過ぎてお釈迦様の法に出会い、信行によって観ることのできる価値観があることを知りました。それは縁起の法則によって観ることのできる、私たちの日々です。日常の土台を毎日しっかり踏みしめながら歩く（生きる）ことに価値の根源を観ると言う毎日です。理性的な価値に基づく合理的生活は今の私にとっては非常なのです。

私は自分の日常だけに生きることは不可能です。私はお釈迦様と理性的の双方の価値観を行き来しながら生活しているはずです。お釈迦様の価値観（私の日常）に逃げ込まず理性的価値観(私の非常）の中で仏の道を続けて行くには、宮沢賢治の姿がひとつの理想像に思えます。「春と修羅」の「序」に彼が書いた「わたくしといふ現象は　仮定された有機交流電燈の　ひとつの青い照明です(中略）たしかにともりつづける因果交流電燈の　ひとつの青い照明です」これは、お釈迦様の日常と社会の非常との間を交流電灯のようにせわしなく行き来する彼自身の姿を表現したものでしょう。あえて私は社会生活を「非常」と表現し私の生活を非常と日常と観ました。非日常が日常となってしまいそこに安住しないためです。縁起の世界をありのままに観るためです。ありのままに観ることは安住することでも流れに任せることでもありません。二つの価値観の間を間断なく行き交い、非常と日常は一如、不二と観ることです。そこに灯る因果交流電灯の青い照明こそが、仏の道を照らす自灯明なのです。私の東京行非日常体験は私の今が過去の因縁によってあり、私の未来が今の因縁により如何に縁起していくかを改め私自身に期待させてくれる貴重なものとなりました。